

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

中堅看護師が看護実践を継続的に語ることによって
生じた変化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): mid-level nurse, narrative, nursing practice-related discussions, significance of discussions 作成者: 須賀, 由美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000526

著作権は本学に帰属する。

原著

中堅看護師が看護実践を継続的に語ることによって生じた変化

須賀 由美子¹⁾

本研究の目的は、中堅看護師に焦点を当て、自己の看護実践を継続的に語ることで、自己や日々の看護実践にどのような変化が生じるのかを明らかにすることである。中堅看護師3名を対象に、介入として自己の看護実践についての語り(1回/月の計3回)を行い、介入直後および全介入2週間後に半構成インタビューを実施した。これらのデータから、中堅看護師に生じた変化を抽出し、質的帰納的に分析した。その結果、中堅看護師は、初めて日々の看護実践について継続的に語り【語ることの効果】を実感していた。そして、この体験は、【ものごとの捉え方の変化】や【周囲への影響を考えた人との関わり方】という自己における変化をもたらしていた。この自己に生じた変化は、看護実践にも影響し、【「業務」から「患者存在を意識した看護実践」への変化】というように常に看護を意識するようになり、さらには、【共に取り組みたい職場環境の改善】という変化も生じさせていた。日々の看護実践を継続的に語ることは、中堅看護師にとって、失いかけていた自己を取り戻すだけではなく、新たな自分へと自己の立て直しにつながることで、そして、自己に生じた変化は、スタッフや上司、組織のことまで考えて行動するという、中堅看護師としての役割を認識した看護実践をもたらすことが示唆された。

キーワード：中堅看護師、ナラティブ、看護実践を語る、語ることの意味

I 緒言

近年の臨床現場は、医療の高度化や在院日数の短縮化及び診療報酬の影響を受けた病棟編成などに伴い、煩雑化してきている。その臨床現場を支えている就業看護職は2006年現在、約81万人であり、中堅看護師はその約60%を占める¹⁾。中堅看護師の実践能力は、病院の看護の質や職場の環境に大きく影響するといわれている²⁾。一方、中堅看護師が臨床で担う役割は拡大し、累積した役割負担感から離職を考える中堅看護師も少なくないという現状がある³⁾。

このような中、中堅看護師が現在の仕事に向ける意欲への影響因子には、自己啓発・積極的看護実践への取り組み、役割曖昧があるという中堅看護師の仕事意欲に関する調査研究⁴⁾や、中堅看護師の能力開発における「ナラティブを用いた内省プログラム」の構築に関する基礎研究⁵⁾等盛んにおこなわれている。

また、現在、中堅看護師を対象としたナラティブに関する研究では、事例評価会として看護をナラティブに語る場を設けた結果、中堅看護師の成長がチーム力を高めたという報告⁶⁾や、中堅看護師が困難や葛藤を乗り越えるために自分自身をどのように変

容させたのかその体験を分析した研究⁷⁾、また、中堅看護師がプラトー状態から解放され専門職の自律性を獲得することが示唆された研究⁸⁾等数多くある。語ることの効果は先行研究^{8,9)}でも明らかである。しかし、いずれの研究も1回語った直後の効果を取り扱った研究であり、その後の看護実践にどのような変化が生じたのか、また、単回ではなく継続的に語ることの効果についての研究は見当たらない。

以上のことから、本研究では、中堅看護師に焦点を当て、自己の看護実践を継続的に語ることで、自己や看護実践にどのような変化が生じるのかを明らかにし、語ることの意味について考察する。中堅看護師が継続的に語ることで生じる変化を明らかにすることは、看護継続教育においてナラティブを組み入れる際の示唆を得るものと考えられる。

II 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、単一対象実験(single subject experiment)^{9,10)}を参考にし、同一研究参加者に介入を3回行い、その後の変化をとらえるため図1のような研究設計にした。

本研究で介入とは、自己の看護実践において、気になっていることや悩んでいること等について自由

1) 遠賀中央看護助産学校

に語ってもらうことを言い（以下、介入という）、同一研究参加者に1ヵ月に1回、約40分の介入を3回実施する。各介入直後と全介入（3回終了）が終了した2週間後に実施した半構成インタビューの内容をデータとした。

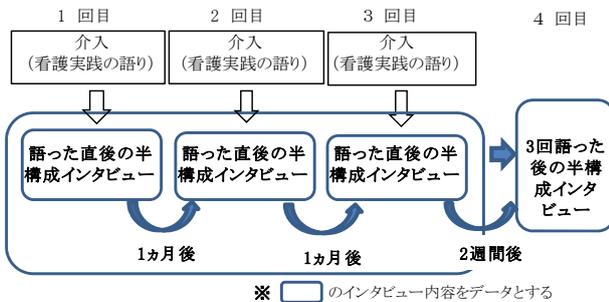


図1 研究設計

2. 用語の定義

「中堅看護師」：ベナー¹²⁾が述べている看護師の5段階の中堅レベル（全体を把握する能力があり、多くの属性と局面の中から重要なものを意思決定できる）にあたる看護師であり、臨床経験5年以上で役職についていない者をいう。先行研究¹³⁾では、中堅看護師の定義の下限は臨床経験5年以上が最も多く、上限は10年～19年と様々である。これを参考に本研究では、中堅看護師の下限を臨床経験5年以上、上限を19年程度とする。

「看護実践を語る」：日々、看護を実践する中で気になった場面、苦慮した場面、印象に残った場面について語ることをいう。

3. 研究参加者

D地域の3カ所の民間病院に勤務する中堅看護師3名

4. データ収集方法

1) データ収集期間

平成26年8月16日～平成27年6月21日

2) インタビュー実施方法

介入後、語った後の変化を捉えるために研究参加者3名に以下の手順で半構成インタビューを実施し、その内容をデータとした。

(1)1回～3回目の介入直後の半構成インタビュー
インタビューガイドを用い半構成インタビューを実施した。インタビューの主な内容は、語ってみて

感じたことや気づいたこと、語る前と後で変化したと思うことについてであった。研究者は、研究参加者の話す内容を批判したり評価したりしないことに留意した。インタビューは3回（1回/月の計3回）実施し、1回の時間は20分程度である。

(2) 4回目（3回介入後）の半構成インタビュー

4回目の半構成インタビューは、3回継続的に語った後の変化を捉えるために、3回目のインタビュー終了後、2週間を目途にインタビューガイドを用い、半構成インタビューを実施した。インタビューの主な内容は、月1回継続して語ったことで気づいたことや自己や看護実践で変化したと思うことについてである。研究者は、研究参加者の話す内容を批判したり評価したりしないことに留意した。時間は30分程度であった。

以上の行程を各研究参加者に実施した。インタビュー内容は、研究参加者の同意を得、ICレコーダーに録音した。

5. データ分析方法

分析の視点は、自己や看護実践の変化と思われる点に焦点を当てた。分析方法は、佐藤¹⁴⁾の質的データ分析法を参考にし、以下の手順で行った。

1) 個々の研究参加者の分析について（1回～3回の半構成インタビュー）

月1回の3回、約3か月継続的に介入したことで、研究参加者にどのような変化が生じるのかを追うために、インタビュー毎に分析を行った。

インタビュー内容の録音データを逐語録として作成し、データ（テキストデータ）の中から、自己や看護実践の変化と思われる語りを抽出（セグメント化）した。次に、抽出したデータにオープンコードを割り当て、より抽象度の高い焦点的コードへ置き換えた。最後に、それらコードから概念的カテゴリーを生成した。以上の手順を研究参加者3名ごとに行い、各1回～3回のデータを分析した。

2) 継続的（1回/月の計3回終了後）に語った後の分析について

全介入終了後、語ったことでどのような変化が生じたのかを把握するために4回目の分析を行った。まず、研究参加者3名のインタビュー内容の録音データを逐語録として各々作成し、データ（テキストデータ）の中から、自己や看護実践の変化と思われる語りを抽出（セグメント化）した。抽出したデー

タにオープンコードを割り当てた。次に、研究参加者3名の共通性と異質性に着目し、オープンコードのグルーピングを行った。グルーピングされたオープンコードをより抽象度の高い焦点的コードへ置き換えた。最後に、それらコードから概念的カテゴリーを生成し、その関係性を図にした。

6. 確実性、信憑性の確保

本研究を実施するに当たり、インタビューの内容や方法についての確実性を確保するために、プレインタビューを実施し、得られたデータからインタビューガイドやインタビュー方法が適切であったか評価し、修正をおこなった。さらに、信憑性を高めるために、逐語録を繰り返し読み、データの分類や解釈においては、指導教員3名のスーパーバイズを受け、合意を得るまで検討を実施した。

7. 倫理的配慮

施設の管理者に研究の趣旨を説明後、賛同を得た施設にポスターを掲示し、研究参加者を募集した。研究に協力の意思があった応募者に、文書並びに口頭で研究の目的や方法、中断の自由性、不利益を生じないこと、守秘義務や個人情報の厳守、また、この研究は個人並びに施設に対する評価が目的でない

ことについて説明し、同意書による同意を得た。インタビュー日時、場所は研究参加者の希望を重視し、場所は会話が漏えいしないように配慮した。インタビュー内容は、ICレコーダーに録音することの許可を得た。また、データ及び記録媒体は、鍵のかかる場所に保管し、研究終了後に破棄した。本研究は、日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号 14-002号)を得て実施した。

Ⅲ 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者3名(A氏、B氏、C氏)の概要及び3回の介入の主な内容を表1に示す。

2. 個々の研究参加者の分析結果

各研究参加者が介入直後の半構成インタビューで語った内容の中から、自己及び看護実践の変化と思われる語りを抽出し、個別に分析した結果を表2~4に示す。概念的カテゴリーは【 】で、焦点的コードは《 》で表す。また、研究参加者の語りは「 」斜体で示し、その文末にコード番号を示した。意味がとりにくい場合は、()内に補足を行った。尚、紙面の関係上、研究参加者A氏のみ語りのデータを用いて説明する。

表1 研究参加者の概要と看護実践の語りの内容

	年齢 性別	臨床 経験	背景	看護実践の語りの主な内容		
				1回目	2回目	3回目
研究参加者A	40歳代 女性	14年	X病院 (200床以下)、現部署に異動して1年半	日々疲れていて患者の声を聞く余裕がない。今回の異動は前部署での目標途中での異動になり、まだ葛藤している。しかし、今の部署をよくなっていきたく思っている。	1回目のインタビュー後から看護を意識して動いている。患者への声かけも変わった。スタッフと話すときどうすれば分かりやすいかやスタッフと良い看護をしたい等考えたりしている。	スタッフが異動した。納得のいかない人事だが、振り回されないようにしたい。先日コミュニケーションの研修にいった。人と関わる勉強をしていきたい。人の話が聞ける人になりたい。
研究参加者B	30歳代 男性	12年	Y病院 (500床)、実習指導者	感覚とか流れて仕事をしている。根拠を持って説明できたらいいなと思う。今道に迷っている感じがする。スタッフや上司と話さないといけないと思うが、感情が残っていて話せない。	周りは何も変わらないが、今は落ち着いて仕事ができている。スタッフを自分にあわせようとしていたことに気づいた。チームを意識するようになり感謝しないといけないと思う。自分が変わりたいという焦りが空回りしていたのかもしれない。	自然体でやれている。周りを見ながら伝わるまで伝えていこうと考えるようになった。看護がやるべき事とも考えていきたい。1日の振り返りをするようになり、日々気持ちよく仕事に取り組んでいる。
研究参加者C	40歳代 女性	20年	Z病院 (300床以下)、面接直前に部署異動となる、実習指導者	異動したばかりで、まだ自分らしさをだせていない。自分の精神状態が患者に影響しないか不安になる。若い人は覚えが早く遅れをとっている感じがする。勉強しているがなかなか活かせない。	随分病棟には慣れてきた。今までの経験を活かしたいと思う。話すことで再発見できている。今新人のプリセプターをしている。自分の学生時代のことを思い出し、つらい思いはさせたくない。大事に育てていきたいと思っている。	今の病棟は相談しやすい雰囲気がありいいなあと思っている。がんばらなきゃと思う。一つ一つ考えながらやっている。スタッフにも声かけ、基本を大事にする病棟にしていきたい。

1) A氏の分析結果

1回目のインタビューでは7つの焦点的コードから4つの概念的カテゴリーが、2回目のインタビューでは、6つの焦点的コードから3つの概念的カテゴリーが、そして3回目のインタビューでは、11の焦点的コードから4つの概念的カテゴリーが生成された(表2)。以下、概念的カテゴリーについて説明する。

まず1回目でA氏は、日頃の悩みや思いを初めて話したことで【現状の思いの言語化】ができ、悩みの原因を認識し、今までもやもやしていた気持ちの整理ができています。気持ちの整理ができたことで、《成長へ向けた努力》をしたい思いや、良い先輩であるために《後輩への優しい声かけ》をしていきたいという【自己成長志向の意識化】ができ、成長したいという思いが芽生えている。成長への思いが芽生えたことで、【見え出した成し遂げたい看護】という自分のやりたい看護を漠然とではあるが考える余裕や【周囲との意図的な対話】というもっと人と分かり合いたい思いが生じている。

「自分が日頃こんなことに悩んでいたんだ(中略)言葉にしてみてもこういうことにもやもやしていたんだなあとはっきりわかりました。すっきりしました。(A1002)」
「私は、新人の時からわりと異動が多くて、変わる度に、初心に戻って考えるようにしています。(中略)できるだけ苦痛に感じるのではなく楽しく毎日ひとつずつ成長できるといいなああって、そういう先輩でありたいって思っています。(A1008)」
「自分が思っている看護が、なんか漠然としている看護が、話しているうちに見えてきたというか(中略)実際は難しいんだけどそれが見えてきたような気がします。(A4004)」
「(スタッフは)経験豊富な人達なので、きっと話すとうっかりあえるとは思いますが、なんせこういう話はしたことがないので、話す機会を作らないといけないのかなあ(A1006)」

2回目では、看護実践を語ることで《考えていることや関心のあることへの気づき》や《いろんなことを考えてやっている自分》等【見えてきた今の自分】というように、今の自分が何に関心があるのかが明確になり、もっと学びたいという思い【芽生えた学習意欲】が生じている。学習への意欲が芽生え

たA氏は、《できることをやっていきたい思い》や《看護を変えたい思い》等【共にできることから変えていきたい看護】というスタッフと積極的に取り組みたいという思いが芽生えている。

「今日(看護実践の語り)、少し教育的なところの話が出ましたけど(中略)関心があるんだなああって、だから話したんだなああって思いました。(A2002)」
「もちろん私もまだ未熟なので、一緒(新しいスタッフと)に勉強していききたいなああって思っています。(A2008)」
「話しているうちに(中略)なんだかやれるかなああって気がしてきました。(A2012)」

3回目では、もやもやが解消し【渦の中から抜け出し取り戻した自分】というように渦の中から抜け出せた自分を感じている。そして、【今までと違う自分】というように語りの場が振り返る場となり自信を取り戻している。さらに、《流されない自分》になったり《冷静にみることの必要性》が大事だと気づき、【認識が変わり安定した自分】というように考え方や捉え方が変わったことで、精神的に安定することができている。この変化は、【協力して取り組みたい患者にとっての良い看護】という意味を芽生えさせていた。

「人は、その場所に長くいたり、渦の中にいると見えなくなる時がありますよね。それがこうやって話すことでその渦から抜け出ることができるとだなあと思います。(A3002)」
「次回は何を話そうって話題を探している自分があります。そう思うだけで、今までとは違う自分があります。(A3016)」
「もちろん現場は何も変わらないんですけど(中略)自分自身の考え方や捉え方を変えることで、精神衛生を保てるんだなああって、そういう風に持っていけるんだということがわかりました。(A3012)」
「今まで(中略)一回はいつてみるんですけど、だめだったら諦めて流されていた自分がいたんですけど、患者にとって良い看護を提供するためにはどうしたら良いかを考えるようになりました。(A3017)」

表2 A氏の分析結果

1回目			2回目			3回目		
概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード	概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード	概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード
現状の思いの言語化	はっきりした日頃の悩み	・日頃の悩みや思いがはっきりわかった	見えてきた今の自分	考えていることや関心のあることへの気づき	・振り返ることができる ・教育に関心があると気づいた	渦の中から抜け出し取り戻した自分	もやもやが解消し取り戻した自分	・もやもやが解消した ・本当にすっきりしている
	思い出した忘れていた思い	・幸せだと気づいた ・人に優しくしたいという思いを思い出した					渦の中から抜け出せた体験の一つになった	・花開く感じがする ・渦の中から抜け出せる ・精神を安定させる手段の一つになった
自己成長志向の意識化	成長へ向けた小さな努力	・小さな努力を続けていきたい ・毎日1つずつ成長していきたい	芽生えた学習意欲	大事にしたいこと	・謙虚さを忘れないようにしたい ・自分自身のことを忘れることなくやりたい	今までと違う自分	振り返りの場	・振り返る場になっていた ・話すことを整理する段階で振り返っている
	後輩への優しい声掛け	・後輩を支援していきたい ・後輩に優しく声をかけるように心がけたい					学ぶ意欲	・一緒に勉強したい ・主任の自分に厳しいところを学びたい
見えてきた成し遂げたい看護	見えてきたやりたい看護	・自分のやりたい看護が見えてきた ・自分のやりたい看護をスタッフとやりたい	共にできることから変えていきたい看護	できることをやっていたい思い	・新人と一緒に頑張りたい ・できることをやっていたいきたい	認識が変わり安定した自分	考え方・捉え方の変化	・考え方や捉え方を変えることで精神衛生が保てる
								冷静に見ることの必要性
周囲との意図的な対話	スタッフや上司と話す機会	・スタッフと話す機会を作りたい ・主任と話す機会を作りたい	看護を変えたい思い	看護を変えたい思い	・今のスタッフと看護を変えていきたい ・保清改善に取り組みたい	協力して取り組みたい患者にとっての良い看護	諦めない思い	・もう少し今必要な看護について学びたい ・諦めないで頑張りたい
	友達や先輩との話す機会	・友達や先輩と話したくなった					患者にとっての良い看護	・良い看護を提供する方法を考えるようになった
							業務改善への工夫	・業務改善するための工夫を考えるようになった ・できる範囲の改善を探すようになった

2) B氏の分析結果

1 回目 のインタビューでは7つの焦点的コードから4つの概念的カテゴリーが、2 回目 のインタビューでは、7つの焦点的コードから4つの概念的カテゴリーが、そして3 回目 のインタビューでは、8つの焦点的コードから4つの概念的カテゴリーが生成された(表3)。以下、概念的カテゴリーについて説明する。

まず1回目 でB氏は、語ることで溜まっていた様々な思いが噴出し【感情の言語化】が起き、今まで処理できていない感情が残っていることに気づいている。そして、「語ることで自分が変わる楽しみ」というように自分が変わるかもしれないという【自己変化の予感】を感じていた。変わる予感を感じたことで、「自己と向き合わないといけない問題」や「無意識な看護実践」等【自己課題の明確化】とい

うように自己の課題を自覚でき、今まで殆ど話していなかったスタッフや上司と話したいという【周囲との対話】を意識的に行いたいという思いが芽生えていた。

2 回目 では、「整理できた感情や溜まっていたもの」や「自分が追い込まれていた原因への気づき」というように【自己理解できるようになった自分】という変化を自覚し、【安定した自分】を実感していた。そして、周りは何も変わらないが「受け止め方の変化」が生じ、【自己認識の変化】というように受け止め方や意識が変わるだけで景色が変わって見えると気づき、今まで考えたことのなかったスタッフのことを考え、【個々を尊重した対応】をしていきたいという思いが芽生えていた。

3 回目 では、【無意識の自己への気づき】というように意識していない考えや感情に気づき、「話すこ

表3 B氏の分析結果

1回目			2回目			3回目		
概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード	概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード	概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード
感情の言語化	残っている感情への気づき	・立ち戻った気がする ・感情が残っていることに驚いている	自己理解できるように なった自分	整理できた感情や溜まっていたもの	・言葉にできなかった感情や溜まっていたものに気づいた ・自分の中で整理できた	無意識の自己への気づき	気持ちの整理	・本当にすっきりした ・気持ちの整理がついた
	処理できていない感情	・感情が理解できていないことに気づいた		自分が追い込まれていた原因への気づき	・ちゃんとしていることに気づいた ・周りの優しさに気づいた		意識していない考えや感情への気づき	・思っていなかった考えや感情に気づけた ・話すことは大事で効果があると思った
自己変化の予感	語ることで自分が変わる楽しみ	・語ることで自分がかわるかもしれないと思う ・楽しみになった	安定した自己	話すことの大事さを実感	・専門的なことを話すのは大事と思った ・言葉にするのは大事だと持った	見えてきた今後進む道	話すことが勉強	・話すこと聞くことは本当に大事と思った ・語ることに勉強になっている
自己課題の明確化	無意識な看護実践	・看護実践について考えたことがなかったことに気づいた		落ち着いている自分	・自分で自分のケアをしている感じがする ・すっとして落ち着いている		悩んでいる時に見えてくる道	・悩んでいる時に道が見えてくる ・大事にしたいことが見えてきた
	自己と向き合えない問題	・自己のこだわりについて冷静に考える必要がある ・自分自身の課題と向き合う必要性を感じた	自己認識の変化	受け止め方の変化	・固執しなくなった ・ダメな自分を受け止めイライラしなくなった	内面が変化した自分	自分の中身の変化	・周りを見る余裕が出てきた ・自分の中で整理できた中身が変化していくのが分かる
周囲との対話	上司との会話	・上司ときちんと話さないといけない		意識が変わり違って見える景色	・気持ちを新たにできる ・意識が変わるだけで周りの景色が変わると気づいた		職場における意識の変化	働き出したメタ認知
	人への伝え方	・人に上手くつたえることができるようになった	個々を尊重した対応	今まで考えたことがないスタッフへの思い	・一人よがりではなく ・皆に上手く伝えたいと思う	落ち着いてできている仕事		・落ち着いて仕事ができるようになった ・やっていたことをやるようになった
						意識した会話	・会話を意識するようになった	

とが勉強」であると感じ【見えてきた今後進む道】というように語ることの大事さと効果を実感していた。悩んでいる時に道が見えてくるという体験をしたB氏は「自分の中身の変化」と感じるほど【内面が変化した自分】を体験していた。内面の変化がおきたB氏は、【職場における意識の変化】というように周りのことを考えながら落ち着いて看護実践できる余裕が芽生えていた。

3) C氏の分析結果

1回目のインタビューでは5つの焦点的コードから3つの概念的カテゴリーが、2回目のインタビューでは、5つの焦点的コードから3つの概念的カテゴリーが、そして3回目のインタビューでは、8の焦点的コードから4つの概念的カテゴリーが生成された(表4)。以下、概念的カテゴリーについて説明する。

まず1回目でC氏は、語ることで「やれている自分への気づき」ができ、【芽生えた自己効力感】というようにやれている自己を認識できている。また、「自分のことを話すことの新しさ」を感じ、【自己開

示の大事さ】を実感していた。そして、「ちゃんとしたいという思い」を自覚したことで【蘇ってきた成長意欲】が生じていた。

2回目では、語り振り返ったことで「冷静に見える自分」に気づき、【見えてきた今の職場環境】というように今の病棟の良い所が見えてきている。そして、「基本に戻ってやっている看護実践」や「患者や学生のことを考えてやっていることへの気づき」というように【根拠に基づいた看護実践】を自覚し、さらに、【実習環境改善への意欲】が芽生えていた。

3回目では、「気持ちが軽くなり薄れてきた不安」というように、異動に対しての不安が語ることで【新しい職場への適応】ができている自分を自覚し、落ち着いて仕事ができるようになっていた。また、「真剣に考えてやっている自分」や「予想もしていないことを話すことの驚き」というように【新たな自己の発見】に気づき、【俯瞰的に捉えることができるようになった自分】という余裕が生まれていた。そして「スタッフに問いかけながら良くしていき

表4 C氏の分析結果

1回目			2回目の			3回目		
概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード	概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード	概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード
芽生えた自己効力感	今までの自己の振り返り	・働いてきた自分を振り返れた	見えてきた今の職場環境	振り返り見えてきた今の病棟	・振り返ることができた ・気分的には楽ということが見えてきた	新しい環境への適応	気持ちが軽くなり薄れてきた不安	・話したいことを話すので気持ちが軽くなってきた ・異動しての不安が薄れ落ち着いて仕事できた
	やれている自分への気づき	・案外考えてやっていた自分に気づいた		冷静に見えている自分	・冷静に自分のことを見えていると気づいた		新たな自己の発見	予想もしていないことを話すことの驚き
自己開示の大事さ	自分のことを話すことの新鮮さ	・普段仕事のことは話すが自分のことは話さない ・話をして新鮮な感じがする ・安心して話せた	根拠に基づいた看護実践	患者や学生のこと考えてやっていることへの気づき	・一人一人の患者のこと考えてやっている ・病棟や学生のこと考えてやっていたと気づいた	新たな自己の発見		真剣に考えてやっている自分
	実感した聞いてもらうことの大事さ	・いくつになっても聞いてもらうことは大事と思った		基本に戻ってやっている看護実践	・一つ一つ基本に戻ってやっている ・初心に戻れたようで新鮮な感じがする		認めてもらうことの嬉しさ	・やっていることを認めてもらっている感じがする ・全く違う目で見てもらっている感じがしている
蘇ってきた成長意欲	ちゃんとしたという思い	・しないといけないことはちゃんとしたい ・頑張っていたころの自分を思い出した	実習環境改善への意欲	実習指導への思い	・実習先の先生とものと学生のことについて話さないといけない ・スタッフに学生のことを分かってもらうようにしたい	俯瞰的に捉えることができた自分	自己の俯瞰的な振り返り	・話して聞いてもらうことで振り返りができる ・メタ認知が身に着くと思う
							変わっていた自分への気づき	・自分が変わっていたことに気づいた ・基本の大切さに気づいた
						共に協力して取り組みたい職場環境の改善	スタッフに問いかけられるようになった ・力を合わせて病棟を良くしていきたい ・同僚と一緒に業務改善したい	

い病棟」というように【共に協力して取り組みたい職場環境の改善】という意欲が芽生えていた。

3. 継続的(1回/月の計3回)に語った後の分析結果

継続的(1回/月の計3回)に語った後、自己及び看護実践にどのような変化が生じたのかを捉えるために、研究参加者3名に半構成インタビューを実施した。その内容を分析した結果、14の焦点的コードから5つの概念的カテゴリーが生成された(表5)。そして概念的カテゴリーの関係図を作成した(図2)。以下、概念的カテゴリーについて説明し、その関係性についても説明する。

まず、概念的カテゴリーについて説明する。研究参加者は、看護実践の語りを重ねるごとに、「やれている自分へ気づき」、「話す度に落ち着いていき取り戻した自分」というように様々な自分に気づき、継続的に【語ることの効果】を実感していた。そして、「考え方や人に対する捉え方が変わった自分」や「流されずにやれることをやりたい自分」というように【ものごとの捉え方の変化】が生じていた。

「話して聞いてもらうだけで、承認してもらっている感じがして、やれる自分に気づいていったような気がします。(A1019)」「語って聞いてもらってるだけなんだけど、なんか肯定的に受け入れられてもらってる感じがして落ち着いていく自分がいた。(B4026)」「流れていたのが立ち止まって考えるって感じですね。(C2021)」「真面目な自分が取り戻せたかなあって思ってます。(B4030)」「余裕をもって物事みれるようになった。(A4015)」「簡単に風が吹くだけで変わるような変化とは違うような(中略)考え方というか、人に対する捉え方というか自分の内面が変わったんだと思います。(B4011)」

ものごとの捉え方が変わったことで「スタッフへの影響を考えるようになった自分」へと変化し、【周囲への影響を考えた人との関わり方】というように人との関わり方が変わっていた。ものごとの捉え方が変わったり周囲への影響を考えるようになった研究参加者は、「患者の存在を意識するようになった日々の看護」や「看護を意識しだし感じるようにな

った看護をしている実感」というように日々の看護実践が【「業務」から「患者存在を意識した看護実践」への変化】というように常に看護を意識するようになり変化していた。さらに、【共に取り組んでいきたい職場環境の改善】というように良いケアをするためにスタッフ一人一人を尊重し業務改善をしていきたい、そういう雰囲気の職場にしていきたいという思いが芽生えていた。

「今回このように話すようになってから、新人に指導する時など（中略）どうすればわかってもらえるかなあって考えるようになりました。（A4010）」

「自分が日頃（中略）看護とかあまり意識していなかったんですね。それがこうやって話していくうちに（中略）看護を意識するようになりました。（A4001）」

「もっと患者と深く関わりたいなあって考えるようになりました。（A4002）」

「患者さんの存在をいつも意識するようになりました。（A4006）」

「患者さんのところに目的をもっていくようになりました。（B4013）」

「仕事についてこんなに考えた

ことはなかったからですね。今まで働かされてるって感じがしてましたけど、今は働いてるって感じです。（B4029）」

「バランスを取りながら人の歩調に合わせて慎重に進んで行けたり、お互いを尊重しながら進めていけたらいいなあって思ってます。（A4016）」

「こういう話す機会があれば、（スタッフ）それぞれの考えを聞いてもっと良い技術に、ケアにできるのではないかなあって思います。私が、できるだけ話やすい雰囲気を作ってあげたいなあって思ってます。（C4007）」

次に、概念的カテゴリーの関係図（図 2）について説明する。生成された概念的カテゴリーは、その意味内容から、自己に関すると思われるものと看護実践に関すると思われるものに分別できた。自己の変化に関すると思われるものを ○ で、看護実践に関すると思われるものを □ で表した。

研究参加者は、看護実践について継続的に語ったことで、やれている自分に気づいていき、自分を取り戻し安定していく自分を感じており【語ることの効果】を実感していた。そして、精神が安定したこ

表 5 3 氏の 4 回目（3 回継続的に語った後）の分析結果

概念的カテゴリー	焦点的コード	オープンコード
語ることの効果	やれている自分への気づき	・やれていることに気づいてすっきりしている ・承認してもらっている感じがしてやれている自分に気づいた
	自分のことを話すことの大事さ	・何かをつかみかけた感じがする ・自分のことを話して振り返ることは大事だと思う ・立ち止まって考える感じがする
	過去の影響の大きさへの気づき	・過去が今の自分を築き上げていることに気づいた ・看護学校時代のことが大きく影響していることに気づいた
	話す度に落ち着いていき取り戻した自分	・余計なことを考えずに仕事するようになった ・肯定的に受け入れてもらっている感じがして、落ち着いていく自分がいた ・真面目な自分が取り戻せた ・ここ1～2か月は安定している
ものごとの捉え方の変化	考え方や人に対する捉え方が変わった自分	・考え方や人に対する捉え方が変わった ・余裕をもって物事を見れるようになった ・反応の仕方に余裕が出てきた ・人に対して批判的な考えをしなくなった ・周りの人を尊敬するようになった ・人を責めることが無くなった ・管理者に対しての不満が無くなった ・スタッフの良いところが見えてきた
	流されずにやれることをやりたい自分	・小さな努力ができるようになった ・自分でやれることをやろうと思うようになった ・流されていた自分がいたが一つ一つちゃんとしていきたい ・できるところからしていき役割をとっていきたい
周囲への影響を考えた人との関わり方	変わったスタッフとの会話の仕方	・聞くことが出来るようになった ・人の話に耳を傾けるようになった ・スタッフとゆづり話すようになった
	スタッフへの影響を考えた自分	・自分をコントロールできるようになりたい ・スタッフに良い影響を与えられるようになりたい
	考えるようになった効果的な話し方	・効果的に話すためにはどうすれば良いか考えるようになった ・新人に指導する時、どうすればわかってもらえるか考えるようになった
「業務」から「患者存在を意識した看護実践」への変化	もっと学びたい人との関わり方	・学生との関わり方を学びたい ・もっと聞く技術や話す技術を身に付けたい ・スタッフと意識して話していきたい
	患者の存在を意識するようになった日々の看護	・患者と深く関わりたいと考えるようになった ・患者のところへ目的をもっていくようになった ・考えて患者と話すようになった ・患者の存在を常に意識することが大事だと思うようになった
共に取り組んでいきたい職場環境の改善	看護を意識しだし感じるようになった看護している実感	・意識して看護するようになった ・今は働いている感じがする ・一つ一つが業務でなくなり看護している感じがする
	実行していきたい相手を尊重した関わり	・一人一人の意見を取り上げていきたい ・お互いに尊重しながら歩調を合わせて進んでいきたい ・スタッフそれぞれの考えを聞いて良いケアをしていきたい ・話やすい雰囲気を作っていききたい ・基本的なことをスタッフが行えるよう働きかけていきたい
共に取り組んでいきたい職場環境の改善	取り組みたい良いケアのための業務改善	・患者が安心してケアを受けることができるよう取り組みたい ・振り返りながら業務をやっていききたい ・業務改善に取り組みたい

とで余裕をもってものごとみれるようになり、【ものごとの捉え方の変化】や【周囲への影響を考えた人との関わり方】という自己の内面に関すると思われる変化が生じていた。これら自己に生じた変化は、患者の存在や看護を常に意識する変化を生じさせ、【「業務」から「患者存在を意識した看護実践」への変化】や【共に取り組んでいきたい職場環境の改善】という日々の看護実践の変化を生じさせていた。

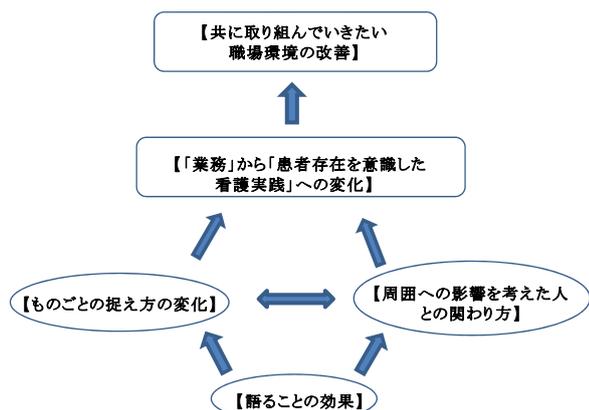


図2 概念的カテゴリーの関係図

IV 考察

まず、研究参加者3名のインタビュー1回～3回における介入直後の変化について、個別に考察する。次に、継続的(1回/月の計3回)に語った後に生じた変化について考察する。最後に、これらを踏まえて、看護継続教育においてナラティブを組み入れる際の再考の一助となるよう、その提言について述べる。

1. A氏の継続的に語ることで生じた変化

A氏は、1回目で【現状の思いの言語化】という言葉にする体験をし、悩みの原因について認識できている。A氏は勤務異動して1年半である。新しい部署は、これまでとは全く違う環境で覚えることも多く、自分の思うような看護ができていないという混沌とした状況の中で悩みを抱いていた。この状況を語り、その悩みの原因が、異動をまだ納得していなかったことから生じていると気づいている。前部署での目標があり、それを中断しての異動であったことで、気持ちの整理がつかず、今ある目の前のことをただやっていたという状況であったと推察する。これは、吉田ら¹⁵⁾も述べているように、同じ病院内における異動でも、中堅看護師にとっては職場の変

化に対する違和感と驚きが大きく、現職場での看護に深みを感じることが出来ずにいたのではないかと考える。

A氏は、語るうちに過去にも数回異動をし、それを乗り越えてきた自分がいたことを思い出したことで自己を取り戻し、「毎日少しずつでも成長できたらい」と語り、【自己成長志向の意識化】をすることができている。胸の中に抱えていた思いを語ることで、自己を取り戻し、揺らぎから抜け出せたのではないかと考える。そして、【見え出した成し遂げたい看護】というように、自分のやりたい看護について考えることができるようになってきている。さらに、話すことの大事さを実感したことで、【周囲との意図的な対話】をしたいという思いが生じ、周りの人ともっと関わりたいという余裕がでてきている。

自己を取り戻したA氏は成長意欲が芽生え、2回目では、【芽生えた学習意欲】、【共にできることから変えていきたい看護】というように看護を変えていきたいと具体的に考えるようになってきている。

さらに、3回目では、「渦の中から抜け出した感じ」と表現しているように、前へ進むことができたのではないかと推察する。これは野口¹⁶⁾が、これまでに自分が経験した様々な出来事、さまざまな思い、それは語られることによって整理され、関連づけられ、意味づけられると述べているように、A氏は語ることで、現実の自分がやっていることを意味づけることができたと考える。また、A氏は「話題を探している自分があります」と語っているように、語ることで振り返る場となり、【今までと違う自分】というように新たな自己の生成ができ、さらには、【認識が変わり安定した自分】というように精神的に安定した自己へと変化している。また、揺らいでいた職業的アイデンティティを安定させ、看護実践にも変化を生じさせている。そして、【協力して取り組みたい患者にとっての良い看護】というやりたい看護が明確になり、それを諦めず実現へ向け工夫しながらやっていきたいという意欲へ繋がっている。

2. B氏の継続的に語ることで生じた変化

B氏は、1回目では自分でも今まで気づけなかった【感情の言語化】ができている。今までの上司やスタッフへの感情がまだ処理できていないことを自覚し、その感情の原因は相手ではなく自分自身の中にあることに気づいている。B氏は、看護人生におい

て行き詰まりを感じ、混沌とした状況下にあったと推測する。辻ら¹⁷⁾の、中堅看護師の時期がプラトー現象（進歩の停滞する時期）を起こす傾向にあるという研究からも明らかなように、B氏もこのプラトー現象を起こしていたと考える。言葉にならないものが自分の中に渦巻いており、そこから抜け出したいと模索していたのではないかと推察する。

B氏は、実際に語ってみて気持ちの整理が付き、その効果を実感したことで【自己変化の予感】を感じたのではないかと考える。さらにB氏は、今まで無意識に看護実践をしていたことや処理できていない感情に気づくことができている。そして【自己課題の明確化】ができ、向き合わないといけないという課題認識ができる自分へと変化している。その変化は、【周囲との対話】という今まで話せていなかったスタッフや上司と話したいという思いへと一歩踏み出す勇気を生起させたと考える。これは、関¹⁸⁾の現状と向き合うことが出来た場合は、現状から踏み出したい、状況を変えたいという意思へと繋がるという研究結果と一致している。

現状と向き合うことができたB氏は、2回目では、【自己理解ができるようになった自分】へと変化し、語ることをまるで【安定した自分】と感じるほど落ち着いて行く自分を自覚している。また、日々気持ちが安定して仕事ができるようになったことで、【自己認識の変化】というように、物事の受け止め方が変わり、ありのままの自分を受けとめることができるようになっていく。B氏は、今までの自分とは違うと感じるほどの変化が起こっている。この変化は、今まで考えたことがないスタッフのことを考えるようになり、【個々を尊重した対応】をしていきたいという思いを生起させている。

さらに自己の変化は、3回目では、【無意識の自己への気づき】というように、意識していない考えや感情に気づく自分へと変化していた。そして、【見えてきた今後進む道】というように、悩んでいる時に何をすれば良いかや自分が大事にしたいものが見えてくるようになる等【内面が変化した自分】を自覚していた。これらの自己に生じた変化は、【職場における意識の変化】というように、今までスタンドプレイでやってきた看護実践が、周りを意識しながらやっていきたいという看護実践へと変化している。

3. C氏の継続的に語ることで生じた変化

C氏は、今回のインタビュー直前に突然勤務異動となっている。慣れない病棟で不安を抱きながら、病棟に1日でも早く馴染もうと努力している状況であった。C氏にとっては大きなストレスがかかっていたと推察する。しかし、話すことで、【自己開示の大事さ】を実感し、自己の振り返りができている。そして、【蘇ってきた成長意欲】というように、漠然とはあるが、頑張りたいという思いが湧き出ている。

2回目では、【見えてきた今の職場環境】というように、現病棟の良い所にも気づく余裕がでてきたり、【根拠に基づいた看護実践】の大事さに気づいたりしている。C氏は話して聞いてもらうだけで承認してもらっていると感じ、過去の自分を正しく自己評価していき、自己の有能性を確認できていき、自己の立て直しができただのではないかと考える。そして、【実習環境改善への意欲】が芽生えたと考える。

3回目では、精神が安定し【新しい環境への適応】ができていることを実感している。また、【新たな自己の発見】というように、予想もしていないことを話したり、実習指導や患者のことを考えてやっている自分に気づいている。C氏は、異動したことで一時的に不安は抱いたが、語ることをきっかけに、やれている自分や、異動して変わっている自分に気づき、自己を取り戻し、進むべき方向性が見え、安定してきたということではないかと考える。C氏は、さらに、【俯瞰的に捉えることができるようになった自分】へと変化し、現在の自分をしっかり捉えることができるようになっていく。この自己の変化は、【共に協力して取り組みたい職場環境の改善】という意欲へと繋がり、患者にとってよい看護が提供できるよう、病棟の雰囲気を作りたいという思いや、良い指導者になりたいという意欲を生起させ、日々流れていた看護が、基本を大事にしながらやりたいという看護実践へと変化している。

4. 継続的に語ることで生じた変化

研究参加者3名は、背景も違い、悩みや思いも様々であり、それを人に話す機会も無い状況であった。しかし、今回、継続的（1回/月の計3回）に語ったことで、様々な思いを言葉にし「やれている自分への気づき」というように自己を承認していくことが出来ている。自己を承認できたことで、気持ちの

整理ができていき「話す度に落ち着いていき取り戻した自分」といように、自己を取り戻すことができるという【語ることの効果】を実感していた。榎本¹⁹⁾は、自己の体験を披露し、様々な思いを吐露するような語りには、カタルシス効果、自己洞察効果、不安低減効果という自己開示の3つの機能が働いていると述べている。研究参加者は、1回目ですべて様々な思いを吐露し、A氏は【現状の思いの言語化】ができ、B氏も【感情の言語化】ができ、カタルシス効果が働いたのではないかと考える。また、C氏は、異動しての不安を語ることでカタルシス効果が働き、【芽生えた自己効力感】という、やれている自分に気づくことができたのではないかと考える。

そして、2回目では、それぞれ【見えてきた今の自分】や【自己理解できるようになった自分】というように自己洞察が深まったと考える。3回目では、【渦の中から抜け出し取り戻した自分】という自己を取り戻したり、【内面が変化した自分】や【俯瞰的に捉えることができるようになった自分】というように、3氏とも自己の内面が変化している。そして、それぞれの自己の内面の変化は、看護実践にも影響を及ぼし、【協力して取り組みたい患者にとっての良い看護】や【職場における意識の変化】、【共に協力して取り組みたい職場環境の改善】というように、職場環境のことを考え看護を行うという変化を生じさせていた。この変化は、継続的(1回/月計3回)に語ることで生じた変化であると考えられる。

やまだ²⁰⁾は、私たちは「語る」時、それを他者に対してだけではなく、自己に対しても語っていると述べている。研究参加者は、聞いてもらうだけで承認されている感じがし、「やれている自分への気づき」というように自己に気づいていき、肯定的に受け入れてもらっているという感じを持ち、「話す度に落ち着いていき取り戻した自分」というように自己の捉え直しができるようになったのではないかと考える。そして、自己の捉え直しができる研究参加者は、看護を良くしていきたいという看護に対する考えが変わり、実践の変化が生じていた。このような段階を追った変化は、3回継続的に語ったことで生じたと考えられる。

5. 看護継続教育への提言

中堅看護師が看護実践を継続的に語ることは、日々の煩雑な業務に翻弄され不安定になっている自

己を取り戻す際、最も有効な手段となり得るのではないかと考える。特に、A氏やC氏のように勤務異動などで職業アイデンティティが揺らぐことが予想される時期や、B氏のようにプラトリー現象を起こしている時期においては、その揺らぎから早く抜け出せるのではないかと考える。継続的に語ることで、自己の過去と現在における様々な出来事について意味づけができ、自己の有能性に気づいていく。そして、新たな自己を生成することができ進む方向性が見え、未来へ向け思考できるようになると考える。この変化は、継続的に語ることで得られる変化であり、ゆっくりではあるが、確実に語った時の自己から新たな自己へと進化していると考えられる。野口²¹⁾は、語り手と聴き手とのやり取りの中で、自己は姿をあらわし、変形され、更新されていくと述べている。自己が変形され、更新されていくためには、語る→自己を取り戻す→新たな自己の生成→語るというサイクルを回し続けることが必要であり、その方法の一つが継続的に語ることであると考えられる。そして、このことは中堅看護師が生き生きと看護実践できるための一助となるのではないかと考える。

以上のことから、中堅看護師が、看護実践を継続的に語る機会を看護継続教育において組み入れる工夫が必要ではないかと考える。その時の聴き手は、できれば利害関係がなく語り手と同じ物語的文脈に生きる看護職が当たることが望ましいと考える。また、聴き手の反応は語り手に大きく影響することを考えると、聴き手の聴く技術の育成も必要になってくる。今後、中堅看護師が、日々の看護実践を自由に語れる場の体制作りを施設内外問わず検討していく必要があると考える。

6. 研究の限界と今後の課題

今回は、研究参加者に介入を継続的に3回行うことで、自己や看護実践に変化が生じることを捉えることができた。しかし、中堅看護師が看護実践について継続的に語ることの効果を捉えるためには、対象数を増やすこと、また、研究結果に影響を与える可能性がある介入回数及び介入方法については継続的に検討していく必要がある。また、地域や病院の設置主体も限定されており、転用可能性については限界がある。この件についても今後検討していく必要がある。

V 結論

本研究は、中堅看護師が看護実践を継続的に語ることで生じる変化を明らかにすることを目的とした。その結果、以下の変化が生じることが明らかとなった。

1. 中堅看護師は、初めて看護実践について継続的に語り、「話す度に落ち着いていき自分を取り戻した自分」という【語ることの効果】を実感していた。
2. 継続的に語ることで、「考え方や人に対する捉え方が変わった自分」や「スタッフの影響を考慮ようになった自分」という自己の内面と思われる【ものごとの捉え方の変化】や【周囲への影響を考えた人との関わり方】という変化が生じていた。
3. 自己の内面に生じた変化により、「患者の存在を意識するようになった日々の看護」という看護を常に意識するようになり【「業務」から「患者存在を意識した看護実践」への変化】を生じさせていた。
4. 中堅看護師に生じた看護実践の変化は、個に留まらず、【共に取り組んでいきたい職場環境の改善】というスタッフを尊重しながら、患者にとっての良いケアのために一緒に業務改善に取り組みたいという看護実践の変化を芽生えさせていた。

謝辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆様、また、研究参加者選定にご協力いただきました研究対象施設の関係者の皆様、ならびに研究を進めるにあたり、ご指導いただきました日本赤十字九州国際看護大学大学院看護学研究科 本田多美枝教授、寺門とも子教授、柳井圭子教授に心より感謝申し上げます。本研究は、平成27年度日本赤十字九州国際看護大学大学院修士論文の一部に加筆修正したものである。

(受付 2017.8.29 採用 2017.12.13)

文献

- 1) 日本看護協会：平成21年版 看護白書. 277, 東京, 日本看護協会出版会, 2009.
- 2) 相馬一二三：中堅ナースの潜在能力を引き出す

研修—研修のプロセスを重視した病棟間留学の導入. 看護管理, 11(12):980-984, 2001.

- 3) 瀬川有紀子, 石井京子：中堅看護師の離職意図の要因分析—役割ストレスと役割業務負担感の関連から—. 大阪市立大学看護学雑誌, 6:11-18, 2010.
- 4) 佐野明美, 平井さよ子, 山口桂子：中堅看護師の仕事意欲に関する調査—役割ストレス認知及びその他関連要因との分析—. 日本看護研究学会雑誌, 29(2):81-93, 2006.
- 5) 小山田恭子：中堅看護師の能力開発における「ナラティブを用いた内省プログラム」の構築に関する基礎研究. 日本看護管理学会誌, 11(1):13-19, 2007.
- 6) 細野克子, 豊田明美, 藤井美子, 他：ナラティブで伝える中堅看護師の実践知. 看護展望, 33(2):99-105, 2008.
- 7) 伊澤しのぶ：看護師としてのアイデンティティの獲得に向けて—葛藤を乗り越えるプロセスに着目して—. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 37:1-8, 2012.
- 8) 白柿奈保：訪問看護師が実践に向かう気持ちを支える体験—訪問看護ステーションのスタッフナースの語りから—. 日本赤十字看護大学紀要, 24:87-95, 2010.
- 9) 松村ちづか, 筑後幸恵, 星野純子：看護師がスピリチュアルペインを語る意味. 埼玉県立大学紀要, 9:7-12, 2007.
- 10) Baltes, M. M., Zerbe, M. B. : Reestablishing self-feeding in a nursing home resident. *Nursing Research*, 25: 24-26, 1976.
- 11) Landolt, M. A, Marti, D. Widmer, J., et al. Does cartoon movie distraction decrease burned children's pain behavior? *Journal of Burn Care & Rehabilitation*, 23: 61-65, 2002.
- 12) Patricia, Benner: *From Novice to Expert Excellence and Power in Clinical Nursing Practice*. 2001, 井部俊子監訳：ベナー看護論—初心者から達人へ—. 17-29, 東京, 医学書院, 2005.
- 13) 小山田恭子：我が国の中堅看護師の特性と能力開発手法に関する文献検討. 日本看護管理学会誌, 13(2):73-80, 2009.
- 14) 佐藤郁哉：質的データ分析法. 33-52, 東京, 新

- 曜社, 2008.
- 15) 吉田祐子, 良村貞子, 青柳道子, 他: 中堅看護師が経験した病院内異動の実態—キャリア試行期と確立期の2事例の検討—. 看護総合科学研究会誌, 13(2):27-37, 2011.
- 16) 野口裕二: 物語としてのケア: ナラティブ・アプローチの世界へ. 44-46, 東京, 医学書院, 2002.
- 17) 辻ちえ, 小笠原知枝, 竹田千佐子, 他: 中堅看護師の看護実践能力の発達過程におけるプラト—現象とその要因—. 日本看護研究学会雑誌, 30(5):31-38, 2007.
- 18) 関美佐: キャリア中期にある看護職者のキャリア発達における停滞に関する検討. 日本看護科学会誌, 35:101-110, 2015.
- 19) 榎本博明: ほんとうの自分の作り方—自己物語の心理学—. 109, 東京, 講談社, 2002.
- 20) やまだようこ: 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?—. 教育心理学年報, 39: 146-161, 2000.
- 21) 前掲 16) p. 48-49.

Original Article

Changes in mid-level nurses because of continuous nursing practice-related discussions

Yumiko SUGA¹⁾

This study focused on mid-level nurses. We aimed to determine how continuous practice-related discussions change nurses and their daily nursing practices. In addition, we examined the significance of these discussions. The subjects of this study were three mid-level nurses, and the intervention was nursing practice-related discussions (once per month, a total of three times). Semi-structured interviews were conducted immediately after the initial discussion and 2 weeks after all the discussions were completed. We obtained data on the changes that occurred in the mid-level nurses, which were then analyzed qualitatively and inductively. The results showed that these mid-level nurses continuously discussed their daily nursing practices for the first time and felt the “effects of talking.” The discussions led to various personal changes, such as changes in the nurses’ “perspectives on things” as well as “interpersonal relationships based on their influence on other people.” These personal changes in turn affected their nursing practices, and the nurses reported becoming conscious about nursing care at all times. This changed the nurses’ practices from “performing duties” to “being conscious about patient-centered nursing practice.” These personal changes also led to work environment improvement. By having continuous discussions of their daily nursing practices, the mid-level nurses regained their professional identities, which they had started to lose, and established new identities. These personal changes appeared to influence their nursing practice as they recognized their roles as mid-level nurses and acted taking other staff, their bosses, and even their organization into consideration.

Key words: mid-level nurse, narrative, nursing practice-related discussions, significance of discussions

1) Onga Central Nursing and Midwifery School